



一般社団法人日本ボリビア協会 ASOCIACIÓN NIPPON-BOLIVIA

<http://nipponbolivia.org>

admin@nipponbolivia.org

042-673-3133



日本ボリビア協会会報誌

カントウータ

Cantuta No.28

目 次

1. ボリビア人医師、日本で開業・・・・・・・・・・・・・・・・ヘルマン・ベラスケス
2. 二年間のボリビア生活を振り返って・・・・・・・・・・・・・・・・大川 裕司
3. ボリビアの教育制度に触れて・・・・・・・・・・・・・・・・上崎 雅也
4. ボリビアにおける水産養殖業の現状と展望・・・・・・・・濱満 靖
5. ボリビアのキヌアとドイツの食生活・・・・・・・・山口香代子
6. 日本人4人のフォルクローレグループ・ワイラハポナンデス・秋元 広行

1. ボリビア人医師日本で開業

埼玉県朝霞市・あおば台診療所

ベラスケス・ヘルマン

私は1952年(昭和27年)10月23日に南米ボリビア共和国(現在ボリビア多民族国)で生まれました。ボリビアで育ち教育を受けて高等学校を卒業した後1972年に国立サン・アンドレス大学医学部に入学しました。当時は政治的に非常に不安定な時代で入学前の約6か月間大学は閉鎖され、卒業前も約9か月間閉鎖になり、漸く1980年1月ごろ卒業することができました。



写真1-1

夢がいっぱいで生まれたてほやほやの医師として、卒業式前の1979年8月にブラジルへ飛んで、ペローホリゾンテ州のサオ・フランシスコ・デ・アシス病院で脳外科医としてトレーニングを始めました。しかし、上記のような政治的混乱のため必要な書類が揃わなかったため約1980年4-5月ごろに帰国せざるを得ませんでした。

ボリビアは母国であり、決して悪いところではないので再出発としたいと思いつつも、そのころ地元の大学には脳外科医局は無かったので、とりあえず社会奉仕でもしようとして1980年9月ごろにアマゾン川の源流地方のパロス・ブランコスという村に行くことになりました。熱帯雨林に囲まれた人口1000人以下の集落にある小さな診療所で勤務を始めました。小児科、産婦人科、内科、感染症、動物や蛇による咬傷治療の小外科など、いわゆる総合診療をする何でも屋で非常に貴重な経験にはなりましたが、このままの状態を続けていいのだろうかといつも悩んでいました。

1981年5-6月ごろにラ・パス市に戻ったときに懐かしい人と会いました。私は医学生時代にも外国語が大好きで、当時、ボリビアの日本人会館で日本大使館主催の日本語の授業が始まり、さっそく登録して日本語も勉強することにしました。

当時大使館関係者で日本語の先生としてボランティアしておられたのが大野透太郎さんでした。

「君って今は何をしているんだ」と尋ねられ状況を説明すると、大野さんは「それなら君は日本で勉強したらどうだ。国費の留学制度があるから申し込んでみたら。力になるから。」と言って下さいました。その助言を頼りに1981年9月に退職し、留学資格と奨学金のための日本語能力試験の準備に入り幸いにも年末には合格し、1982年4月から2年間日本へ留学できることになりました。

大野さんには、何とも嬉しく願ってもいなかった新しい道、新しい夢を開いて頂いたことに今でもとても感謝しています。出発の際に「日本での花見(Festival de los ceresos)が楽しみだね」と見送りの言葉頂きました。大野さんはその数年後に帰国され、故郷の和歌山のどこかに住んでおられるようです。できればもう一度お会いしたいと思います。

日本での生活は1982年(昭和57年)4月に始まりました。残念ながら私が大阪に着いた時に桜は完全に散っていました。大阪外国語大学に入学し6か月間の日本語学習が始まりました、ただ日本語を勉強するどころか、南米各国から来た約20名の仲間たちと毎日お祭り騒ぎが続き、6か月があつという間に過ぎてしまいました。8月の夏休みの最中に東京医科歯科大学の脳神経外科教授の面接日が迫っていました。慌てて日本語を覚えなければと焦りました。幸いにも教授は怖いイメージの方でしたが英語が流暢な方で、優しい父親と相談しているような感じで面接は問題なく終了し安心して大阪に帰りました。

1982年10月、待ちに待った脳神経外科医局に入局し、正式的なご挨拶と自己紹介を済ませてやっと病棟へと思ったら、日本の医療制度上は日本の医師免許がなければ患者の診察は出来ないことが判り、大変ショックを受けました。内科医と違って外科医ですから実際に手術しなければ技術面での進歩は望めません。ブラジルでは一般診療は出来ませんが、大学病院のように教育施設であ

れば指導医の立ち合いのもとに診療、手術を含めて許されています。教授はご親切にも一人の医局の若い先生に私の指導を依頼し、私にはこの先生が何をしているか見て、どこまでも追いかけると指示されました、そして手術を観る時は手術室に入り手を洗い手術衣を着て、なるべく近くで手術を観察しなさいと言って下さいました。とてもありがたいことでした。

しかし、やはり物足りない、自分自身で手術する経験を積まないと本国に帰れない、日本で立派な博士号を取って帰国しても発展途上国では役に立ちません。手に技術を持たないと外科医はやっていけないと非常に心配な毎日でした、1年過ぎたある日、指導教授に呼ばれて「今までどうですか」と聞かれました。せっかくのチャンスなので教授に上記の問題を説明すると、教授はしばらく考えて「じゃ、君は国家試験を受けて日本の医師免許とるしか道がありません」と言われました。私は無責任にも「判りました。試験を受けますと答えました」、教授は医局長を呼んで「昨年の問題集を買ってきてください」と頼まれ、手にした問題集を見たときこれは冗談ではないとすぐ判りました。とにかく質問の最後のひらがな部分の「何々ですか」しか読めませんでした。半分諦めて教授室を後にしました。

数日後、運命的な出来事ありました。アメリカから帰国した先輩の先生に「君は医師国家試験を受けるんだって」声をかけられ、言葉の問題を話したところ、「自分だってアメリカの脳外科専門医の資格を取れたのだから、君も漢字を1日10個覚えれば1年間で3.650個になり国家試験受けるには十分だよ」と励まされました。そして「毎日10個の漢字を教えるから勉強しろ」と厳しいお言葉を貰いました。

その後、日本語と医療技術の習得、日本・ボリビア間の医学教育制度の違いの確認手続(もし不足する科目がある場合は日本で追加受講しないと日本の国家試験は受けられません)、などに係る膨大な書類の翻訳などに約1年かかりましたが、教

授のお力を借りて幸い問題なく受験できるようになりました。

それでも医師国家試験を合格するまでは大変な道のりでした。もちろん1回目、2回目は不合格でした。時間だけが過ぎて指導教授は退官され事実上大学とも縁が切れてしまいました。その時、またもや運良く医師会の関係で面識があった埼玉県朝霞市の朝霞厚生病院理事長だった田中茂先生(故人)に相談したところ、何と「君は国家試験受けに来たのだから私の病院で勉強しなさい」とまさに神の救いとも思えるお言葉を掛けて頂き、やっとのことで3回目の1988年(昭和63年度)の試験に合格し晴れて日本の医師免許を取得できました。

その後は朝霞厚生病院で脳外科医として色々な先生方のご指導受けながら歩み始めました、その後、並木向病院、蓮田病院、埼玉脳神経外科病院で脳外科医として勤務し、貴重な経験を積んできました、2012年(平成24年)1月には朝霞市に夢であった「あおば台診療所」を開設し、現在は患者さんの年齢、性別、国籍を問わず「総合診療」を行っています。



写真1-2 あおば台診療所

者さんの年齢、性別、国籍を問わず「総合診療」を行っています。

これまでの人生のいくつかの節目で大変お世話になった日本の多くの方々のご恩に報いるためにも、微力ながら少しでも日本での地域医療に

貢献できればと思い日々頑張っております。

2. 二年間のボリビア生活を振り返って

元青年海外協力隊・現LAフーズ代表
大川 裕司

私は、2014年7月から2016年7月までの2年間、サンタクルス市にあるオガール・ドン・ボス

コという児童養護施設に、青年海外協力隊の青少年活動隊員として派遣されていました。オガールとは、スペイン語で家庭や家という意味ですが、ドン・ボスコという神父が創始者であるカトリック・サレジオ会が運営主体である施設です。そこには、6つの施設があり、6歳から18歳くらいまでの子どもたちが500人ほど住んでいました。養育者がアルコール中毒や貧困状態であったり、路上生活者であったり、若年層の望まぬ出産であったり、様々な理由から養育者と一緒に生活ができずに、施設にやってきた子どもたちです。ボリビア政府発表の数字はないものの、ボリビアの報道機関による発表では、1万から1万2千人の養育者に見捨てられた子どもがいるとのこと。そのため、保護施設の数も多く、そしてその多くがキリスト教系の団体によって運営されており、各国からのボランティアも支援しています。その多くはヨーロッパ人で、高校卒業後に半年や1年ほどボランティアとして奉仕しています。若くして、言葉も分からない国でボランティアをすることは、その後の人生に与える影響もきっと大きいことでしょう。



写真 2-1 オガール・ドン・ボスコ児童養護施設

さて、施設の子供達は、学校のような集団生活をしており、グループごとに指導員が付いて、勉強や生活の面倒を見てくれています。休み時間には、サッカーやバスケット、手工芸、ビー玉遊びなど、思い思いの過ごし方をしています。みんなでご飯を食べて、みんなでご飯を寝て、そこは学校のような家のような場所です。その遊んでいる、笑い合

っている瞬間を見れば、他の子どもたちと何も変わらない、ヤンチャで今を楽しんでいる子どもたちです。しかし、温かい家庭とは何か知たがったり、他の子どもより劣っていると感じていたり、普段は表には出しませんが、それぞれが過去の出来事を内に秘め、それを抱えながら生きています。

ところで、日中は学校に行きますが、ボリビアの公立の学校では、通常は半日しか学校に行きません。8時から12時か、14時から18時といった具合です。そして、日本のようなクラブ活動はありません。では残りの時間をどう過ごすかと言えば、オガールでは勉強や宿題をしたり、身の回りの整理やそのグループ毎のアクティビティをしたりします。また、パソコンや木工、溶接、手工芸など様々な技術や技能を習得できる施設を併設していることが多く、放課後などはそこで過ごすこともあります。それは、子ども達が卒業後にすぐに働けるようにと考えられているからです。

一方、一般家庭での子どもの余暇の過ごし方を見ると、各家庭の事情にもよりますが、スポーツなどの習い事に行ったり、友達と遊んだり、もしくは家でスマホやテレビを見ていたりするようです。ところで、家が何らかの商売をしている子どもは、学校に行かない間、その手伝いをする場合があります。世界子供白書によれば、ボリビアの5歳から14歳の子どもで、児童労働に従事する割合は、その年代の4分の1に上ると言われていますが、学校に行きながら家の手伝いをしているのか、義務教育を受けずに大人と同じように働いているのか、通りすがりで見ただけでは分かりません。日本では、子どもが日中に働いていたらすぐに変だと感じるものの、午前か午後のどちらかにだけ授業がある国では、子どもが日中に働いていても普通なことに驚きました。逆を言えば、勉強する機会を妨げていたり、健康的な成長を妨げていたりするのでなければ、子どもも働いていいのです。このようなことを言うのは少し憚れるかもしれませんが、子どもが働くということに、実は価値があるのではないかと思います。それは子どもが

社会の一員であることや役に立っていることに子ども自身が気づいたり、働くということの意味を知ったり、ポジティブな面もあると思うからです。学校だけでは経験できないことがそこにはたくさんあると思います。このように思う背景には、私自身が臨床心理士として日本で不登校やひきこもりの支援をしていたことも関係あるのかも知れません。

さて、ここから話題を変えまして、現地で生活していて、言葉について気になった点を2つ挙げてみたいと思います。

1 つ目は、日ごろの挨拶についてです。人と会う際に、¿Qué tal? や¿Cómo está?などと挨拶し、直訳すると「調子どう?」「ごきげんいかが?」などとなります。それに対して、笑顔で「調子いいよ」、もしくは「万事調子いいよ」などと返したりします。当初、挨拶する毎に自分の調子を考えてしまい、受け答えに時間を要していました。また、「普通」と言いたくて「まあまあ」と答えると、何だか相手はスッキリしない様子なことが多く、むしろ、「どうしたの?」と聞かれることがあります。私としては、自分の状態に向き合い、答えただけなのですが、相手の求めるものとは違ったようでした。そして、質問されて簡単に「調子がいい」と言うことは、ウソをつくような、不真面目なように感じていました。それは、調子がいいという状態が何かよく分からなかったからでもあります。健康、仕事、人間関係、etc. どの点において、何を持って良いと言えるのか。そして、良い悪いの基準について思い返すと、特に問題のない普通の状態か、何か問題のある悪い状態か、普通か悪いしかなかったように思います。そう考えると、「調子がいい」という言葉がなかなか出てこなかったのも分かります。しかし、さすがにそれでは挨拶が円滑に進まないの、いつしか「調子いいよ」などと簡単に言うようになりました。慣れてしまうと案外楽なもので、何しろ一々自分の調子や問題点を考えなくて済みます。良い悪いの基準を考えると、特に問題がない状態というのが、

実はいい状態だと思えるようになりました。もしくは、何か問題があっても、笑顔を作れて、かつ「調子いいよ」と挨拶できている自分を知ると、気持ちに余裕ができたり、ポジティブな気持ちになります。食べるものがある、布団で寝られて。あ、これでいいんだ、幸せなんだと気づくと気持ちが変わります。このように思うのは、日本での物に溢れた現状、そして常に100点を目指し、間違っただけを常に修正する教育が背景にあるような気がしました。良い点にフォーカスするのか、問題点にフォーカスするのか、意識的に使い分けたいものです。とは考えたものの、今思えば、「やあ」程度の挨拶だと割り切れれば、良かったのかもしれませんが。¿Cómo está?皆さんなら何と答えますか。

2 つ目は、二分法による言葉の使い方についてです。ボリビアで生活していて、まあまあという言葉あまり聞きませんでした。講演会などで話者が聴衆に「Sí o no?」と問いかけることがありました。「イエスかノーか」ということですが、話の流れとしては「そうでしょ?」と同意を求める際に使われていました。これを聞いて、何だかストレーナな物言いだと感じました。自分の主張をはっきり述べていて分かりやすいのですが、他の答えは?とふと思いました。先述の調子を聞かれた際の「良いか悪いか」、そしてこのような問いかけなどを聞くと、二分法で物事を言い表す傾向があるのかと思いました。スペイン語の名詞のほとんどが男性名詞と女性名詞に分けられることもそう思うきっかけでした。思考し口に出す言葉というものが日常の生活に及ぼす影響もあると思います。しかし、現実はそのように簡単に二分されるものばかりではありません。すると発する言葉と実際の状況や感情に差が生じることも現実的には多く、そこに目を向けないこともあるのではないのでしょうか。なぜならその差を認めることは、嘘を認めることになってしまうからです。言葉と実際の差を嘘と解釈しないため、整合性を保つためには、他の解釈が必要で、それを“言い訳”と言

うのかもしれませんが。何か間違いや誤りがあればすぐに謝罪する日本人と言われるますが、ボリビア（に限りませんが）では、まずは言い訳や弁明と取れる言葉が出てきます。むしろ、「弁明なりをしっかりと言える方が教育があると見なされる」と聞きました。上記のような日常的なエピソードからも文化や言語の違いを感じ、とても興味深いところですよ。皆さまはどのように感じておられるのでしょうか。ご意見を頂ければ幸いです。

⇒okawa@lafoods.net

3. ボリビアの教育制度に触れて

東京外国語大学大学院在学中

上崎 雅也

2006年の政権獲得以来11年が経過し、2016年2月の4選を目指した国民投票には敗れはしたものの、エボ・モラレス大統領の人気は依然として高い。高水準が続いた資源価格の恩恵もあって、ボリビアの政治・経済・社会は20世紀の貧困からは一歩前進しつつあるようだ。しかし「脱植民地化」「よく生きる」という2009年憲法の理念実現の基盤となる人材の育成については、まだまだ大きな課題を抱えている。人材育成に不可欠な教育制度の整備は、現在この国の最優先課題のひとつであり、中長期的に粘り強く取り組むべき課題と言える。

筆者は、業務で1998年から4年間エクアドルに駐在した当時からアンデス考古学・文化人類学に興味を持ち始め、2006年末から1年半ペルーとボリビアに駐在する間、休暇で遺跡を訪問したり、文献を漁っていた。しかし、ちょっとした出来事でその興味がボリビアの教育政策に傾き始めた。そして、2015年3月末に37年間勤務した会社を退職して、現在、日本の大学院でボリビアの教育改革について研究している。本稿では、何故、今「ボリビアの教育」をテーマにしているのかを説明するために二つの出来事に触れたい。

筆者が仕事を通じて多少関係のあった所謂、白人支配層に属するボリビア人の中に、モラレスが

当選した2005年当時にスペインに移住し、時折、所用でラパスに戻ってきていた人物がいた。ある日、私がアンデス文明に興味がある事を聞きつけ、所有する土器や土偶のコレクションを輸出許可付で2百万ドルで譲渡したいとオファーしてきたことがある。この金額には恐れ入ったが、文化財の収集に興味はないので丁重にお断りした。しかし彼は、『コレクションがすべてレプリカで、実物は一点も含まれない』との申告書さえ作れば簡単に輸出できるから信用しろと迫ってきた。考古学に責任はないが、先住民文化への敬意など微塵もなく金儲けの手段と割り切る態度には、ボリビア支配層が作り上げた人種的・社会的カーストと言う強烈な負の側面を見せつけられた思いがした。

もうひとつの契機になったのが、ラパス駐在当時、進行中であった日本政府のODA（技術協力）案件「教育の質改善プロジェクト、略称“PROMECA”」であった。JICAから派遣された日本人専門家やスタッフの方々とお付き合いするなかで、ボリビアの教育が、例えば、鉱業が国の基幹産業であるにもかかわらず、小中学校の理科に地学、地質学の分野が含まれず、生物分野に傾斜しすぎているなどのカリキュラムの不備に加えて、教員の要員不足や能力不足等の根本問題が大きいことが判ったことである。更に業務上のニーズで秘書を採用する際の面接で、応募者の国語力（スペイン語）が他の中南米諸国に比べて、かなり見劣りする現実に驚かされたこともあった。

これらの経験を筆者なりに要約すれば、ボリビアの国家政策の重要課題は、①「先住民文化を自文化として尊重」し、②「国民の教育水準を向上させ」、③「真の発展の為の人材を地道に育てる」ということになる。

ボリビアの教育史に関するどの資料にも共通するのは、過去の教育改革が失敗してきた大きな要因として「教員の能力不足」が挙げられていることだ。この問題を克服するために、ボリビアは、1994年に大きな教育改革を行ない、モラレス政権誕生後の2010年に新教育法を制定した。私はこの

比較研究をテーマと定め、自分で行った教育関係者、教員、JICA 関係者などへのインタビュー結果を踏まえてこれまでのボリビアの教育政策を次のとおり批判的に考察している。

1994 年改革：

この改革は MNR（民族革命運動党）のゴンサロ（通称ゴニ）・サンチェス・デ・ロサダ政権により 1994 年から 15 年計画（5 年×3 期）で実施された。ゴニ政権のボリビア国内でのイメージは 2003 年の天然ガス紛争以来最悪だが、事実関係を有体に述べるとボリビアで先住民への公教育が「真剣に」議論されたのは、この 94 年改革が初めてであった。ボリビア政府は、94 年にこの改革に先立ち憲法を改正して、自らを「多民族・複合文化国家」と宣言した。これを受けた 94 年教育法で、教育の民主化と、教育および教授方法の質的改革を進めるとの理念を掲げて「西欧文化と先住民文化間における異文化交流教育」と「スペイン語と主要先住民語の二言語教育」を軸とした教育改革を発表した。

しかし、資金・教育手法とも、世銀、米州開発銀行、オランダ、デンマーク、ドイツなど欧米からの援助頼みであったことや、国民のコンセンサスがないまま導入したことなどから国内の反発を招き、教員の能力向上や教育の質の改善という基本的目標を達成できなかったことを理由に「失敗」であったと結論づけられている。

筆者が 2015 年と 16 年に実施した調査でも、先住民語を教える教員の員数、並びに能力不足が明らかであった。農村部では、教科書が届かなかった地域もあり、届いても、先住民語のスペリングの表記法がまちまちで、規範となる表記法（正字法）が存在しないなど、教員を悩ますケースも相当あって、この問題は今もって解決していない。

また、この改革は本来なら 2010 年まで継続される筈であったが、モラレス政権発足時に欧米からの援助が植民地主義的と非難され、殆ど全ての援助が 2006 年を機に中止に追い込まれた。

一方、前述の日本の援助 PROMECA は 94 年改革第二期の事業として 2003 年にスタートし、日本の教

育技術（授業研究、公開授業、板書技術等）の移転が着々と進められ、関係者から高い評価を得ていた。しかしながら、モラレス政権の「ボリビア人によるボリビア方式の教育」への執着は強く、欧米の援助と同列に扱われ（たらしく）徐々にボリビア側の協力を失った経緯があった点は付記しておきたい。

2010 年新教育法：

モラレス政権は、2009 年憲法で国家の在り方を大きく見直した。「脱植民地化」、「多民族性・多言語性」を強く打ち出し、スペイン語に加えて 36 の先住民語を全て公用語と認定した。翌年にはすったもんだの挙句に新教育法が成立した。モラレス政権によれば、これは教育改革ではなく「全く新しい教育モデル」で、その目指すところは次のとおりである。

1) 「脱植民地主義的教育」

2) 「自文化認識教育」

即ち、自文化をよく知ること。

3) 「文化交流性教育」

西欧文化と先住民文化間の交流と、36 の先住民文化同士の異文化交流を図ること。

4) 「多言語教育」

即ち、スペイン語と、36 の先住民語の何れか一つと、外国語（英語になるであろう）の三言語を学ばせること。

5) 「先住民の知恵」を尊び、母なる大地と

「よく生きる (vivir bien)」こと。

6) 教員の育成課程を強化し、現職教員の再研修制度 (PROFOCOM) を採り入れ、教員・教育の水準を高めること。

この新教育法は、インカ帝国時代以前の「アイユ」と呼ばれるアンデス農村共同体における生産型教育を想定している。それ故に「先住民の知恵」を学び「よく生きなさい」と言う事になるのだが、「先住民の知恵とは何なのか?」「先住民の知恵が現代の子ども達の将来に役に立つのか?」といった根本的疑問と批判を各方面から提示されている。今のところ、教育省側からは批判勢力にとって満

足のいく回答はなされていない様であり、残念ながら「先住民文化を自文化として知る教育」が達成できる保証はなさそうだ。そうすると、旧支配層を含めて先住民の文化・伝統を「尊重する」社会の実現は、当分難しいかも知れない。

ということで、話を言語教育に絞るが「多言語教育」も、失敗とされる94年改革における欠陥の修正がされないうちに、強引に導入された印象がぬぐえず、筆者の限られた範囲の調査でも、実際に、先住民語を教えられる教員が潤沢に存在する地域は限られている。ラパス県北部のアイマラ語・ケチュア語話者が近隣に居住する地域では、ある程度のレベルの教員が確保できる様だが、ラパス市内のアイマラ語が必修の学校でインタビューした教員達の大半は、片言すら話せないとの回答であった。郊外の農村部のアイマラ語を母語とする教員でさえ、長年スペイン語で日常を過ごすうちに母語と第二言語であるスペイン語の運用能力が逆転していた。二言語教育、多言語教育を推進しろと言うのは簡単だが、実際に、現場では相当の困難を伴うと思われる。

また筆者の独断であるが、例えば日本語と英語、英語と仏語のように基礎となる文化があり、二つの言語が何れも文字を持っていれば、高等教育を含めた「教育言語」として機能する。しかし、先住民には文化や言語はあっても、それらを視覚的に表現したり記録する文字が存在しないため、例えアルファベット表記で文字化しても、教育言語としてどの程度の機能が期待できるかは疑問である。

実際に36の先住民語のうち、統一的規範が確立されているのはグアラニ語だけである。最大勢力のケチュア語とアイマラ語は、政治的要因もあり規範化は簡単ではないらしく、その他の先住民語を含めて、モラレス政権は、規範化を政府の仕事ではなく先住民有識者の義務と考えている様だ。従い、先住民語の教科書を配布することも、政府の仕事とは考えていないらしい。更に、テレビやラジオといった日常生活におけるメディアの大半

は、スペイン語で放送されており、国民は、毎日大量のスペイン語の情報に接しているが、先住民語によるメディア放送は極めて限られる。先住民語は、先住民とその文化の社会的地位が現在より大きく改善しない限り「生活言語」に留まるしかなく、膨大な文化教養資産の蓄積や最先端技術へのアクセスも可能なスペイン語、或いは英語との二言語・三言語教育という「多言語状況」の中では劣位に留まるしかないであろう。

この様なネガティブな状況下で最も考慮すべきは、これからの国づくりに参加する若者たちが先住民語による教育をどの程度求めているかであろう。民族のアイデンティティと誇りを示す先住民語を教える事が重要であることは言うまでもない。しかしモラレス大統領自身が先住民語で国民に語りかけることはない。更に、現代は、インターネット、SNSが発達し、好むと好まざるとグローバ



写真3-1 コチャバンバ ケチュアの子も達が通うバイリンガル学校

ル化している。そんな状況下、若者たちが学校で先住民語を学ぶ意義を見出す事が出来るのか、出来るとすればその為に、モラレス政権に何が出来るかが問われている。彼ら先住民が、新教育法が規定する多言語教育を通じて「自文化に誇りを持ち」「尊重され」「教育水準向上の恩恵を受ける」ことが実際にできるかどうか、モラレス政権の「多文化・多言語教育」への姿勢が本物なのか、それとも結果的にデモンストレーションで終わってしまうのか注目される場所である。

4. ボリビア水産養殖業の現状と展望

株式会社 国際水産技術開発
(JICA 専門家 カンボジア派遣中)

濱満 靖

瀬戸内海に面した広島県竹原市の半農半漁の町で生まれた私は、父方母方ともに祖父が漁師であったということもあって水産系の大学に進学し、卒業後は地元瀬戸内海のクルマエビの養殖場に就職した。4年目の夏ごろ青年海外協力隊(JOCV)を知り応募したところ合格し、その通知に記された派遣国がボリビアだったことから私のボリビアとの関りが始まった。

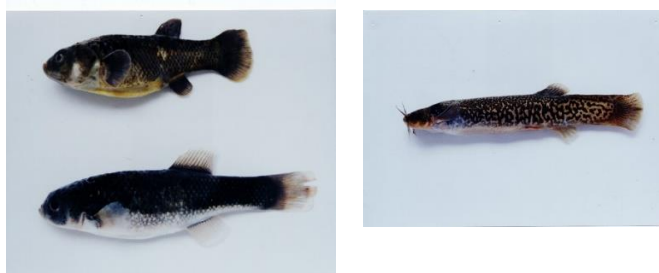
本稿では自身の養殖専門家としての活動の回顧と共に、ボリビアにおけるJICA(国際協力機構)によるニジマス養殖技術協力の歴史を紹介し、統計資料に基づいたボリビア水産業を概観した後、一部現地関係者からの最近の情報も踏まえたボリビア養殖業の将来について述べたい。

私がボリビアに到着したのは1986年9月、26歳の夏であった。当時はJICA専門家とすでに派遣されていた先輩隊員たちが、ラパス県のポンゴ孵化場で生産されたニジマスの稚魚を、ボリビア西部高原地域のアルティプレーノの各農村に配給して養殖普及を行っていた。すでに100程の養殖希望グループへの稚魚の配給と技術指導が実施されていた。私もその普及活動に加わりラパス県を中心に農村回りをすることになった。当時は道も悪く徒歩で数時間というところもあった。電気のない村で泊まった時の満天の星の素晴らしさ、クイ(テンジクネズミ)を腹から開いたから揚げやチューニョ(乾燥ジャガイモ)での歓迎はいい思い出として残っている。

1988年3月4日、チチカカ湖畔のティキーナに無償資金協力で建設された水産センターが開所式を迎え、当時のVictor Paz Estenssoro大統領も臨席されたのを覚えている。その後、ポンゴ孵化場を併用しつつ、稚魚の生産と農村への普及の拠点はティキーナへ移された。私はセンターでの活動を支援するため派遣期間を延長し1989年10月

末に協力隊の任期を終えた。

1991年6月に建設された水産センターを拠点にプロジェクト方式での技術協力が開始された。私は、日本人専門家4名の最後の専門家として1992年2月に再赴任した。他の専門家とともにニジマス配合飼料の開発試験を行い、ボリビアに適した飼料の処方を持示した、また、小湖沼の環境調査や、センターで生産される稚魚を高地に散在する小湖沼に放流した後の追跡調査を担当して、関係技術の移転を行い、調査実施地域ではニジマスの本格的生産が始まった。チチカカ湖の在来魚種(写真参照)についての稚魚生産試験も行い稚



上をプンク、下をカラチと呼んでいた。

マウリ：ナマズの一種

写真4-1 チチカカ湖の在来魚種

魚放流による将来の資源回復に応用できる技術が定着した。本プロジェクトでは、当時掲げられていた数値目標(稚魚50万尾、食用魚16tの生産)を達成し、専門家チームによるニジマス生産基礎技術の移転は終了した。

プロジェクトが終了したとは言え、センターの運営指導と農漁村への普及体制確立のため、ボリビア側から個別専門家の要請がなされて、1999年8月から3年間の3度目の派遣となった。この時よりセンターは法的な組織確立のための政令により、当時の農牧・農村開発省管轄下の独立法人となり、自立運営提案書を作成して、生産工程の効率化や稚魚の販売促進による自己収入の増収に努めた。さらに、当時、市町村(Municipio)からの公共投資の増加による地場産業の育成が高まるなか、ニジマス養殖を計画する市町村への技術の普及や、研修事業の活性化により普及体制が強化された。

海を持たない内陸国のボリビアの水産業は、殆ど河川と湖沼での養殖生産に限られる。それを行う水資源環境は以下の三つの水系に分類される。

- アマゾン水系（マドレ・デ・ディオス川、マモレ川、ベニ川など）
：ボリヴィア領土の北部および北東部の熱帯および亜熱帯地域で、国土の3分の2を占める。ラパス県北部、コチャバンバ県の一部とベニ県、サンタクルス県のアマゾン川に通じる河川流域である。主な魚種はパクー、スルビ、タンバキなどである。
- ラプラタ水系（タリハ川、ベルメホ川など）
：領土の南東部の亜熱帯地域で、タリハ県を中心としたラプラタ川に通じる流域である。主な魚種はサバロ、スルビ、ドラドである。
- アルティプレーノ水系（デスグァデロ川など）
：チチカカ湖を含む領土の南西部の高山地帯に広がる流域で、最下流はウユニ塩湖で自然蒸発して大海に流れ出ない閉鎖水系である。主な魚種はニジマス、ペヘレイ、カラチ、イスピ、マウリである。

ボリビア水産業の概要を FAO（国際連合食糧農業機関）の統計資料から見ると、漁業生産量は1960年代に1,000トンを超え2,000トンに達するが、これは1940年代に移入されたチチカカ湖のニジマス資源の増大によるものであろう。しかし、その後の乱獲により減少し、日本にニジマス養殖について技術協力を要請する契機ともなった。1980年代からは、ラプラタ水系でのサバロや、アマゾン水系における水産業への投資拡大から漁業生産は増加し、漁獲量は一気に4—5,000トン台に達する。その後増減を繰り返しながら増加し近年では7,000トン前後で安定している。

養殖生産量については、1987年にニジマスとコイの生産量として統計に数値が表れ、1990年代には、日本の技術協力によりニジマス生産量が500トンを超える時期があったが、その後300トン程度に低迷する。2002年にパクーとタンバキが統計に表れるようになり、2014年にはこの2種で750

トン、ニジマスも500トンまで復活し養殖生産量は1,400トンの過去最高値を記録する。高度成長や国の養殖振興策に支えら2000年代後半からは右肩上がり増加傾向にある。

水産物の輸出入及び消費については、2013年には漁業養殖生産量は8,247トン、輸入が15,145トン、輸出はなく、生産量と輸入量を加えた国内消費仕向量は23,392トンとなり、人口10,671千人で除した一人当たり年間水産物消費量は2.2kgとなっている。世界的に見ても非常に低い数値だが1990年代の1kg程度からはかなり増加している。生産量にこれ以上の増産を望むのは、生物多様性や自然環境保全の観点からも望ましくなく、今後増えると思われる水産物の需要に応えるためには、輸入だけではなく国内養殖生産量の増加が期待される場所である。

ボリビア養殖業の将来については、最近、2016年12月にボリビアを再訪した際に、私が最後にJICA 専門家として派遣されていた2002年当時の2名のカウンターパートと話すことができた。Rodrigo Santivanez氏は現在農村開発・土地省の独立法人 IPD-PACU (Institución Pública Desconcentrada de Pesca y Acuicultura)の所長、Ronald Vega氏は同じ組織で所長を補佐しているとのことであった。IPD-PACUは、2014年5月に設立され前述の3大水系ごとに稚魚供給と技術普及の研究所を設置し養殖振興を図ろうとしている。ティキーナのセンターでは経験のある技術者の確保、新たな孵化場の建設、飼料製造プラントの設置を、また、ベニ県 Pedro Ignacio Muiba センターでは稚魚生産施設の整備などの組織内の生産能力強化を、さらに2017年度には全国で50余りの養殖振興プロジェクトを実施する計画があるらしい。現在の国の予算の規模は、私が最後に派遣されていた2000年初め頃とは比べ物にならないくらい大きいようである。また、ニジマスについてはバイオテクノロジー技術で養殖された輸入稚魚を利用している業者が多く、防疫の観点からも国産優良稚魚の生産が急務であるとのことであった。

また、サンタクルスでは、日本ボリビア協会の紹介で、サンファン移住地のパクー養殖の先駆者である水島琢磨氏を訪ねた。パクー用配合飼料を製造する業者はあるものの飼料単価が高いうえに配合の処方にも疑問があること、パクーの国内市場は飽和し販売が困難になっていること、加工などの新たな戦略を考える必要があること、新魚種の導入については、魚食性で動物タンパク要求の高いスルビヤピラルクでは飼料単価が高くなり養殖経営上難しく、雑食性のナマズやティラピアも検討しているが、前者は技術的な問題があり、後者は外来種という環境保護の問題があること、等々お聞きした。水島氏は、現在農協勤務のご子息や同じ移住地の大学生で養殖を勉強している上野君など若い世代に期待しているとのことであった。本稿を進めるにあたり FAO の統計を調べたが、2000 年以降のパクー養殖生産量のこれまでの増加は、水島氏の地道な研究成果の賜物ではないかと思ふ。前出の IPD-PACU 所長も前職のコチャバンバの大学教官として学生と共に見学させていただいたと話していた。

ニジマスとパクーについては、基本的な生産技術はボリビアにかなり幅広く定着したと感じている。ニジマスには国産の優良稚魚と飼料の生産が望まれるところである。そのための IPD-PACU ティキーナセンターの役割は重要である。現在、親魚のサイズが非常に小さいので、現在の予算でまずは大きな親魚を育成し、稚魚生産の効率化とともに優良稚魚を生産できるよう努める必要がある。さらに、近々飼料製造プラントが導入されることで、主原料の魚粉の調達次第ではあるが、生産効率がよく養殖経営が成り立つ良質な配合飼料の生産が期待される。

パクーについては、水島氏をはじめとする一部の民間主導で技術開発がなされた感がある。将来の生産増に向けては官民一体となった取り組みが必要だと思われ、さらに水島氏の言葉通り市場と加工といった生産以外の経営的戦略も必要になってくると思われる。



写真 4-2 水島氏宅にて

右から水島氏、筆者、愚妻、上野君、水島夫人

ニジマスの 500 トンを 1,000 トんに、パクー・タンバキの 750 トンを 2,000 トんに、を目標に産官学一体となった養殖生産増に向けて邁進することが期待される。

5. ボリビアのキヌアとドイツの食生活

Ecoterra 東京オフィス

山口 香代子

私とキヌアとの出会いは、今から凡そ 11 年程前になります。私が 20 年前にドイツで結婚した主人（日本人）は、Nutfields 社という、マカダミアナッツを中心に輸入・加工・販売する会社を経営しておりました。その頃主人が参加していたアジアの会（仕事を持つドイツ人と、アジア人を含む幅広い外国人の交流会）で、メンバーのボリビア人女性のカルミアさんと知り合いました。彼女はメキシコ、アメリカの大学を卒業後、日本の青山学院大学で博士号を取得し、当時はボリビア政府の商務担当外交官としてボリビアの各種特産品 PR の仕事をしていました。ドイツ人のご主人も同時期にコンピューター会社の社内研修で半年間来日していた際に、渋谷のハチ公前で偶然知り合ったご縁で後に結婚されたのです。夫妻は現在ドイツのフランクフルトとウィスバーデンの中間に位置する Eppstein エップシュタインという街で Ecoterra GmbH というオーガニックを含むナッツ、ドライフルーツ、穀類等を輸入・製造・加工し販売する会社を営んでいます。そして 5 年前に亡くなった私の主人の会社の代表的な商品とブラン

ドを、同社が引き継ぎ今に至っています。

私たちがカルミニアさん夫妻と知り合い親しくなったある日、彼女達の家に参加されました。彼女の手料理、ボリビア料理のピカンテ・デ・ポジョ（鶏肉のトマト煮込み）に添えられていたのがキヌアでした。キヌアはとても栄養バランスの良い優良な健康食品なのだということは以前より彼女から聞いていました。少し辛みのある鶏料理とキヌアの独特な食感は好ましく、主菜との相性も良い美味しいキヌア、これが私とキヌアとの出会いでした。私はその後、キヌア入りシリアルミックスをヨーグルトに、キヌアの Pasta は唐辛子を効かせたイタリア風のトマトソース（アラビアータ）でいただいていた。キヌアはドイツでも主にオーガニック店で販売されています。種類も多く、ポップしてシリアルミックス、エネルギー等々の材料としても定着しています。また、キヌアの Pasta 類もバラエティー豊かに揃っています。

カルミニアさんが担当したスイスでボリビアの物産を紹介する展示会に、同行したことがありました。キヌアやナッツなどの食品、酒類、毛織物、衣類、アクセサリ、陶器等多くの品々と共に、生きているアルパカや、リヤマを屋外・屋内で見ることが出来ました。アルパカは愛らしい姿や動作に似合わず結構粗暴な性格なのには少し驚きましたが、ボリビアの特産品の美しい色使い、人の温もりを感じる品々を堪能し明るくにこやかなボリビアの人々と楽しいひと時を過ごしました。会場はスイスの田舎町でしたが、多くの人が集まる盛況な展示会でした。その後、私の主人はブラジルナッツ等の視察を兼ねてボリビアに出張し、最初に降り立ったラパスで高山病に罹りながらもカルミニアさんの案内で、各地・各社を巡る実りある旅をしました。ただ、私自身は、いつかはボリビアに行きたいと思いつつも未だに訪れることが出来ず、とても残念に思っています。

この様な不思議な出会いをもたらしてくれたドイツ生活で、私は空いている時間に日本料理をド

イツの方に、ドイツ在住の日本人女性に主にイタリア料理とドイツ料理をお教えしていました。このような経験を通じて知ったドイツの一般的な家庭での食生活、食習慣について私の体験を通してお話したいと思います。

ドイツ人の食事はカルトエッセン（冷たいつまり調理しない食事）が主流で、温かい調理した食事は1日に1回という習慣があります。この習慣は時代と共に変化してきていますが、全国的に見ればやはり基本的な食習慣でしょう。朝食はヨーグルトと、ブローチェンと言うポピュラーな丸い形のパンなどに、バターやジャム、ママレード、ヌテラ（イタリアのココア入りヘーゼルナッツペースト）などを付け、それと一緒にコーヒーなど、子供は牛乳などの飲み物と、時にはハムやソーセージ、チーズを摂ることもあります。

昼食は伝統的には家で温かい調理された食事を摂ります。しかし、男女平等に働いている現代のドイツ人や独身者は自分で用意した、簡単なサンドイッチのような軽食と飲み物でランチとします。たまには外食に出ることやデリバリーを頼むこともあります。日本のランチ定食やお弁当と比べても、内容や品数など基本的には簡素で、各自それぞれに自室等で摂ります。日本のように仲間同士で食堂や会議室に集い、揃って取るという習慣はあまりありません。もちろん小さな町にもパン屋さんがありますので、そこへ買いに行くことや、お肉屋さんでワンディッシュの軽食をお店の中のカウンターで摂ることもあります。手軽でリーズナブルな昼食を摂るについては、パン屋さん或いはお肉さんがその役目を果たしています。

ドイツでは大企業が街の中心部にあるとは限らず、大都市に集中していることもありません。会社に食堂を完備している大企業もありますが、働く人は職場近くの住民が多いのです。都市部では日本のようにレストラン一人で或いは仲間・友人と出る機会も多くビジネスランチもありますが、日本より機会は少ないと思います。午後も授業のある子供たちは簡単なランチを持参したり、学校

によっては給食が提供されます。

夕食は基本的に家で家族と共に取ります。スープやパスタ、肉類を焼いたり、ローストするといったお料理が主ですが、共働きの家庭では夕食もカルトエッセンにビールかワイン或いは紅茶、ジュース類やミネラルウォーターで済ませる事が多いのです。もちろん、数多くの冷凍食品も活躍しています。また、出来合いのサラダや煮込み料理、ローストされた肉はデリカテッセン、スーパーマーケットや肉屋さんでも購入することが出来ます。Pizza のお店も多くデリバリーも盛んです。又ドイツには多くのトルコ人が住んでいて、彼らのケバブやお惣菜は野菜が豊富で、値段も手頃なので私もよく利用していました。

私の住んでいたフランクフルトは金融の街でしたので多くの外国人が住んでおり、タイ、ベトナム、アラブ、インド、韓国などの料理を楽しむことが出来ました。初めてこの街に住み始めた頃に比べて中国人の人口が増え中華料理店も増えて、料理の質と種類は格段に向上しました。中国各地から来ている彼らの地方料理を、ドイツで味わう事が出来るのです。また、ここではフランス、イタリア、ギリシャ、スペイン、ポルトガル、ドイツの家庭料理から、ドイツ各地の珍しい地方料理、ホテルのメインダイニングの豪華なお料理までいろいろと楽しむことが出来ます。もちろん、日本料理はラーメン、うどんやそば、お寿司、鉄板焼き、懐石風和食まで何でもあります。

ドイツではパン、それからチーズやハム、ソーセージ等の加工食品は実に多種多様にあります。私はとうとう覚えられませんでした。数多くあるハム、ソーセージには朝食向け、夕食向けと伝統的に認識されているものがそれぞれあるのです。何となく感じたことは、強い香辛料が使われているハム、血で作られたソーセージ等はやはり夕食向きだと思いました。ドイツのソーセージと言えはフランクフルトソーセージを思われるかと思えます。実は本場のフランクフルターは日本の普通のソーセージと同じ位の太さで長さは2～3倍の

長さがあります。何故日本で太いソーセージをフランクフルトと称するのかを未だに解明出来ていません。ドイツではソーセージは駅中や街角、お祭り、週末の屋外マーケットなどに出ている屋台で焼いて細長いパンに挟んで、或いは一口サイズにカットし紙皿に乗せて供されます。そこには必ずケチャップ、マスタードが各自好きに添えることが出来る様置かれています。そして人気のカレーヴルスト（ドイツ語でソーセージはヴルスト）は、ソーセージを一口大に切りその上にケチャップ、マスタード更にカレー粉を振りかけるのです。この食べ方を初めて見た時は驚き感心しました。結構美味しいので一度お試しください。私は自宅で焼くソーセージよりもこの屋外で立食いするソーセージの方が格段に美味しくチャンスを見つけて食べていました。ドイツにお出かけになられたら、是非お試しください。このソーセージ屋台は何時でも何処でも見つけられます。

私は5年前に日本に帰国し、昨年より Ecoterra GmbH 東京オフィスとして、キヌアとマカダミア、ブラジルナッツ等の国内販売に取り組んでいます。東京オフィスを始動した昨年の11月に招待客限定のオーガニック専門販売会社の社内展示試食会に Quinoa ready 2 eat（加熱・加圧済みのすぐに食べられるキヌア）の展示が決まりました。この社内展示会に是非ボリアの伝統織物を使いたいと思いき急遽探しましたが、インターネットで調べ販売店に尋ねても時間が掛かる、在庫は無い等ではと困り、辿り着いたのは日本ボリビア協会でした。ご相談を受けてくださった協会の方はご親切に、お手持ちのアワヨを気持ち良くお貸しく下さいました。更に生きたキヌアも展示したいと探しましたところ山梨県の上野村の方より畑から抜いたばかりのキヌアと、実が付いたまま乾燥したキヌアも分けて頂き、キヌア畑も見学させて頂きました。実は私も植わっているキヌアを見るのは初めてで、展示会でも皆様の注目を浴びました。Quinoa ready 2 eat の展示に用意したいと思ったアイテムは、皆様のご好意で揃えることが出来て

希望通りの展示が叶いました。昨年末のボリビア協会のクリスマス会にも出席させて頂き、日本で新しいボリビアとの繋がりが出来ました。このようにいろいろな国産キヌアの関係者とお知り合いになれたことに感謝しています。

現在は取り扱い頂いている各販売店で試食販売をして、お客様から直接に感想やご意見をお聞きしています。お客様より美味しい、使い易そう、手軽で良い、などのコメントを多数いただき励みになっています。

今後も引き続き日本の消費者へキヌアの魅力を伝え、バラエティー豊かで美味しい健康的な食生活のお役に立てて頂けるよう PR して参ります。

INTERNET で、是非 Ecoterra のホームページ <http://www.eco-terra.de> をご覧ください。

INSTAGRAM で [eco_terrajapan](#) にて簡単なレシピ付きの写真を投稿しています。



写真 5-1 日本での Ecoterra 商品の展示販売
下記サイトでご購入可能です。

<http://biople.jp/Form/Product/ProductDetail.aspx?shop=0&pid=4260108091447&vid=&bid=BP01&cat=CAT114&swrd=>

今後共ご支援の程をお願い申し上げます。

6. 日本人 4 人のフォルクローレグループ ワイラハポナンデス

在ボリビア ラ・パス市

秋元 広行

ワイラハポナンデス (Wayra JaponAndes) は、

2015 年 12 月に、普段は異なる音楽グループに所属するボリビア在住の日本人音楽家 4 名の「愛するボリビアに音楽を通じて感謝を伝えたい」との思いから結成された。メンバーは、秋元広行 (ボーカル、ギター)、宍戸誠 (チャランゴ、三線)、桑原健一 (チャランゴ、三線)、渡辺康平 (ギター)、からなり、日本のポップス、演歌、アニメ曲などをボリビア音楽「フォルクローレ」に編曲し、定期的に演奏活動を行なっている。



写真 6-1 ワイラハポナンデス (en La Paz)

Juguete de Amor (原曲:抱いてセニョリータ)、La aventura mística (原曲:魔訶不思議アドベンチャー)、Adiós Mamá (原曲:草原のマルコ)、などを主な演奏曲とし、これまで、ラパス日本人会館、エルアルト市立劇場、オールロ市立劇場、コチャバンバ市立劇場や、各テレビ局などを主な演奏場所として演奏してきた。(2017 年 2 月の演奏予定会場も含む)

われわれ日本人 4 人は必ずしもボリビアに永住しようと思っていたわけではないが、生まれも育ちも音楽の好みも異なるものの、ボリビアはやりやすいことができる国なので、出会ってから今まで住み続けている。メンバー紹介をすると、宍戸誠は、今もなおボリビアフォルクローレ界の頂点で活動を繰り広げる「ロスカルカス」のチャランゴ奏者。自身のグループ「アナタボリビア」を創設して 12 年目となる、ボリビア唯一の日本人歌手秋元広行。ボリビアでも稀有なコミックフォルクローレバンド「チュパイチャキス」のリーダー桑原健一。演奏だけでなくラパス市の音楽学校 3 校でボリビア人にフォルクローレを教えている渡辺康

平の4人である。

普段はそれぞれのグループで活動しているが、自由な時間ができると集まっては練習や演奏に勤しむ。昨年制作した1枚目のCDは「Gracias Bolivia(ありがとう、ボリビア)」と名付け、2017年1月までに5本のビデオクリップを発表した。いずれもYoutubeで視聴可能である。

普段はチャランゴやケーナなどのボリビア楽器しか演奏しない4人なのだが、少しでも今の日本音楽の雰囲気を出そうと、沖縄の三線やエレキギターなども使用している。CD発表後、現地でのメディアにも「新たな形のフュージョン」などとして取り上げられたが、数多く存在する特殊なボリビアのリズムにJ-POPや歌謡曲をどう合わせていくかが大きな課題で、これまでも試作はしたがボツにした曲は数知れない。日本でミリオンセラーとなった曲でも、リズムがしっくりこないことが多く、ボリビアではここ最近、ダンスリズムにうまきはまった歌詞が受け入れられている傾向にあるので、いかにしてシンプルで覚えやすいスペイン語の歌詞を付けるかによって、当地での曲への評価が大きく異なってくる。

最近の収録曲は日本人にとって馴染みの深い、松任谷由実の「春よ、来い。」から、とまりれんの「氷雨」、さらにはアニメ「ドラゴンボール」の主題歌まで幅広い。当地での反響は予想以上に大きく、「オリジナル曲かと思ったほど、リズムにマッチしている。」とか、「プロモーションビデオを撮影するときはぜひ私たちのダンスグループを呼んでほしい。」などのコメントが多数寄せられた。

これまでもラパス市やオーロロ市などで、CD発表会を行ってきたが、現在、いくつかの課題が見えてきた。

1つ目は、ここ10数年来のフォルクローレダンスの主流であるモレナーダとどう向き合うか。単調なこのダンスは、カーニバルともなれば数百人単位で踊られることが多く、その参加者1人だけで数千~万ドル単位の費用をかけ、曲の制作者にはその曲を使うグループから少なくとも数百~

千ドルという単位のお金が支払われる。信仰の証という名のもと、借金をしてまで散財する文化がここ最近では根付いてきており、当然ながらそれに乗じて、モレナーダのみ制作しCD録音するグループが増え続けている。1曲売れば数年間は仕事に困らないほどである。

シンプルでわかりやすいリズムと歌詞が特徴的で、J-POPや演歌などをそのまま使うことは難しい。たとえできたとしても20~30分ほどメドレーを続けなければならないので、数曲は必要となり、三線などの楽器とどう合わせていくかがアレンジのキモで面白いところでもある。

2つ目は、ラパスではアニメファンによるイベントが毎週のように行われており、コスプレに時間とお金をかける若者と、その追っかけまで見かけるようになった。実はボリビアでは今も

「ドラゴンボール」や「母を訪ねて三千里」などの日本のアニメが放映されており、世代を超えて愛されている。当然ながらその主題歌はスペイン語にも翻訳され広く知られており、フォルクローレとの融合によって、普段はフォルクローレに見向きもしない新たな層の心を徐々につかみ始めている。「フォルクローレは好きじゃないけど、あなたたちの音楽はとても気に入った。」というコメントも聞かれた。問題なのは、「ポケモン」、「聖闘士星矢」、「ナルト」など有名なアニメはよいとしても、私たちの知らない日本のアニメが数多くあるということである。ボリビアのそれぞれのファンを満足させようとすると、我々はアニソングループともなりかねず、どこかで線引きをしなければならない。ボリビアの若者にあくまでフォルクローレとして知ってもらふ絶好の機会として両立させるために悩むところである。

3つ目は、我々のグループは不定期のプロジェクトであるとはいえ、もし人気が出てきた場合各自のグループとの兼ね合いをどうするのかということである。特にカルカスの宍戸誠は今も世界中を飛び回っており、ハポナンデスに演奏依頼があってもなかなか参加できないというのが現状であ

る。メンバー中一番人気の彼が来ないとなると TV 番組や演奏場所での盛り上がりにも影響するうえ、さらにボーカルの秋元広行に他国で公演などがあると依頼を断らざるを得ない。4 名の時間をやりくりし、二足のわらじをどううまく調整していくかが大きな課題である。

このような課題が贅沢な悩みというのは我々も重々承知している。しかしこのグループは金儲けのためというより、「日本」という看板を背負いながら、ボリビア人に日本の音楽を楽しんでもらうために結成したという経緯から、ある種の責任感や使命感を感じつつも、この音楽が、今しか、そして我々4 名にしかできないということに幸せを感じている。

最後になるが、各メンバーが日本の両親や友人に感謝を伝えようと、本年 2017 年 12 月に日本公演を予定している。恐らくは日本のフォルクローレファンの多い都市を中心に回り、このツアーを 2 枚のアルバムにして引っさげ、ボリビアへ帰国することとなるだろう。そしてその際は日本とボリビアが融合した最も新しいホットな音楽を、フォルクローレファンの皆様にご提供できることは間違いないと確信している。

ホームページ：

<http://wayrajaponandes.wixsite.com/japonandes>
e-mail：wayrajaponandes@gmail.com

ボリビア関係刊行物の頒布斡旋

- ① 『Los japoneses en Bolivia』 2013-9
100ños de historia de
la inmigración japonesa en Bolivia
2 を原典として 2012 年までを追補
在庫多数
- ② 『ボリビアに生きる』 2000-3
日本人ボリビア移住 100 周年誌
在庫 1 冊
- ③ 『大地に生きる沖縄移民』 2005-12
コロンビア入植 50 周年記念誌
2017・10 在庫予定

④ 『拓け行く友好の懸け橋』 2005-12
カンファン日本人移住地入植 50 周年
記念誌 在庫 1 冊

⑤ 『ともに 50 年そして未来へ』
2006-12

カンタリス中央日本人会 50 周年記念誌
在庫 1 冊

⑥ 『ラパス日本人会 90 年の記録
1922-2012』 2012-10,
2017-10 在庫予定

⑦ 『ギュンターの冬』 2016・7
パラグアイのストロイスル独裁政権時代を
描いた異色のミステリー政治小説
在庫多数

統一価格①—⑦共 2500 円 (税送料込)

ご注文は当協会まで、下記へメール又は
電話で、お名前、ご住所、電話#、
書籍名、冊数をご連絡ください。

admin@nipponbolivia.org

042-673-3133

御支払は銀行振込でお願い致します。(口
座#, 名義人は発送時に連絡します)

編集後記

会報 28 号をお届けします。今回は、日本
で開業している現役のボリビア人医師、
JOCV—OB, 企業駐在員経験者、水
産養殖専門家、ドイツからのキヌア輸入
会社、在ボリビアの日本人フォルローレ
グループと、6 人の方々に、日本とボリ
ビアをめぐるいろいろな体験や見聞につ
いて寄稿を頂きました。執筆者の皆様へ
厚く感謝致します。会員の皆様には、読
後のご感想などお寄せ頂けると幸いです。

編集委員：白川光徳 細萱恵子 杉浦 篤